

暮らして役立つ

西広島

医療情報

82

毎年寒いこの季節にな

話しします。

ると心配なのが脳卒中です。脳卒中は突然脳の血液の循環が悪くなって、意識障害や手足の麻痺などが起る病気ですが、

脳出血の中にも、脳の中の細い動脈が脆くなつて破れる「脳内出血」と、脳の表面にある比較的太い

較的多く、意識障害のある場合には手術をして出血を取り除きますが、少ない場合にはそのまま自然に吸収されるのを待ちます。くも膜下出血は、現在でも死亡率は32〜67%と非常に重症の病気です。発生率も女性で少しずつ増えています。突

す。治療は動脈瘤の場所、形、重症度によって、破れた動脈瘤を直接手術するクリッピング術と、動脈瘤内にコイルという金属を詰めるコイル塞栓術があります。いずれにしても脳出血の危険因子は高血圧、タバコ、アルコールです。平素から血圧の管理に注意して、外出時には防寒対策をしっかりと、特に首には太い頸動脈があつて寒さの影響を受けやすいので、マフラーなどを巻くとよいでしょう。また禁煙して大酒は慎むようにしましょう。

脳出血の予防

「脳出血」と、脳の血管が詰まって起る「脳梗塞」の2つに分けられます。脳卒中は1960年代までわが国の死因の第1位でしたが、高血圧の治療と蛋白質を多く摂るようになったことなどが徐々に減少してきて、

動脈にできたくぼ(動脈瘤)が破れる「くも膜下出血」があります。脳内出血の原因は様々ですが、最も多いのが高血圧で約7割を占めます。日中活動時に起ることが多く、頭痛、急速に進行する半身麻痺、言語障害や意識障害で死に至ることもあります。出血量が比

痛、吐き気、軽い意識障害で起るものが多く、ひどい場合には手足の麻痺を伴ったり昏睡になることもあります。入院時の意識障害の程度がその後の経過に最も大きく影響しますが、

再出血や発症約1週間後に血管が縮んで脳梗塞のようになる脳血管狭窄も重要で

1980年代にはがん、心臓病に次いで第3位となりました。今回はこの中で、脳出血についてお

ともあります。出血量が比

再出血や発症約1週間後に血管が縮んで脳梗塞のようになる脳血管狭窄も重要で

（廿日市市佐伯地区医師会 勝谷・小笠原クリニック 小笠原英敬）
※休日受付医院は18面「今週のお知らせ」コーナーに掲載。